

巻頭言 核医学の明るい未来に向けて 一人と人を繋ぐ

井上 登美夫

Inoue Tomio

(横浜市立大学 学術院 医学群 医学部 放射線医学 主任教授 学部長)



放射性同位元素を利用する“核医学”の領域は、RI 利用自体が全体に減少傾向にある中で、新たな技術革新と共に常に新しい展開が医療の中で起こっていると思われます。今から40年ほど前に医学部を卒業し、核医学に興味を持ち始めた頃、インビボ核医学検査とラジオイムノアッセイを中心としたインビトロ核医学検査の力関係は同等あるいは後者の方が大きいぐらいの状況でした。その後の技術革新でRI インビトロ核医学検査はELISA などRI を用いない測定手法にとって変わられ、インビトロ核医学検査の利用施設・利用件数は激減しました。その一方でインビボ核医学はこの40年の間に、検査内容は大きく変遷してはいますが、現在も堅調に進化し続けていると確信いたします。インビボ核医学の中の変遷においても、CT・MRI・US など画像診断の領域の撮影装置・画像解析ソフト・造影剤の進歩の中で、核医学インビボ検査は衰退し、検査自体が無くなってしまわないかと考えることも何度かありました。しかしながら、その都度何かしら核医学領域では新たな潮流が生まれ、医学研究の場でも、日常診療の場でも核医学は無くしてはならない存在であり続けています。2000年当初ではFDG PET のがん診療への応用が進み、時を同じくして登場したPET とCT が一体化したPET/CT の出現がその普及を大きく後押ししました。最近では認知症診断のためのアミロイドPET やPET/MR が黎明期を迎えています。一方で我が国が遅れていたRI 内用療法も治療件数が増加する傾向があり、特に α 線核種の利用が注目されてきています。

昭和から平成の時代にかけての核医学の様々な変遷を経験した中で、今秋10月に第12回アジアオセアニア核医学会(AOCNMB2017)と第57回日本核医学会学術総会を大会長として主催させていただくことは長年核医学に携わってきた筆者にとって大変光栄なことであり、その開催に向けて支援をいただいている皆様に深く感謝しております。学会は10月5～7日までの3日間、パシフィコ横浜(神奈川県横浜市)にて、第37回日本核医学技術学会総会学術大会及び第7回アジア核医学技術学会国際会議とも共同開催で行われます。

アジアの核医学は、アジア社会の経済発展と共に、特に東アジア地域において、最近10年間で急速な発展を遂げています。そこで、今こそ我々は、ヨーロッパ地域の核医学会のように、アジア・オセアニア地域でも、核医学分野のネットワークをより一層強固なものにする必要があります。欧州核医学会や米国核医学会のような世界的な団体となるために、アジア・オセアニア地域の核医学会のあるべき姿について話し合う場として、AOCNMB2017がそのきっかけになることを願っています。核医学に関心をお持ちの多くの医師・理工学研究者・薬学研究者・放射線技師・看護師そして産業界の方々が集い、職域・学際領域を超えて人と人との繋がり場の提供することが、将来のアジアのそして日本の核医学の発展に繋がると信じています。そのような気持ちから、AOCNMB2017のメインテーマを、「connecting people for bright future of Asia Oceania Nuclear Medicine」といたしました。

本誌の読者の方々にもご参加いただければ幸いです。